

室賀信夫先生の訃

死は突然やってくる。昭和57年2月15日、前日来風邪気味で臥しておられた先生の呼吸が少しあわただしげなので、前日が日曜休診のためこの日往診を約束していたかかりつけの医師に、今すぐ来てほしいと奥さんが電話をかけて、2階の先生のもとへ戻ってこられたら、すでにこと切れていたという。ときに午後1時40分、死因は心不全であった。先生は明治40年（1907）12月21日生れなので、74年と2カ月足らずの生涯を閉じられたわけである。その日からひと月と経っていない。私の頭の中はまだ混乱していて追悼文どころではないが、依頼にこたえて筆をとることにした。首尾整わない文章になるかと思うが、どうかお許しを頂きたい。

先生の誕生日は上記の如くであるが、今、先生の著書『日本人漂流物語』（昭和44年、新学社）に付載されるご自身作成の「年譜」によって、その生涯のあらましを顧みることにしたい。生誕の地は東京の豊多摩郡淀橋町（現新宿区角管）で、“幼時から蒲柳の質であった”と「年譜」には記されている。児童向読物たる上記のご著書は、はじめ毎日新聞社から須見五郎なるペンネームで昭和29年（1954）に刊行されたものであるが、ペンネームの由来は、子供の頃部屋の隅で本を読むことが多く、家の人から“すみごろ”（すみでござろろしているという意）と言われていたのをもじったということであった。それはさておき、先生は東京府立第五中学校（現小石川高校）をご卒業ののち、第三高等学校（文科）を経て、昭和3年（1928）京都帝国大学文学部史学科に入学された。1年終了時の専攻決定においては地理学を選ばれ、飛驒の交通路のことを調べるため現地に赴いておられたとき、はじめての咯血を経験され、休学は2回に及び、このため卒業は遅れて昭和8年（1933）となった。引続いて大学院に進まれ、

日本地理学史を研究テーマとされた。「並河誠所の五畿内志に就いて」（『史林』21巻3、4号）はその頃の研究成果の一部であろう。

昭和12年（1937）京大文学部講師となられたが、「年譜」にはそのことに続いて“小牧実繁教授のもとに東南アジアの政治地理学的研究に従う”とある。小牧教授提唱の“日本地政学”は、思想のない従来の地理学研究に飽き足らぬ思いをしておられたロマンチストの先生にとって、一つの示唆を与えるものであった。評論に啓蒙書にその活躍はめざましく、未曾有の大戦のさなか、世界新秩序の建設を夢みる若き地理学者の観点が当時の著述には明確に示されている。

昭和18年（1943）助教授に昇進されたが、翌年から療養に専念せられ、遂に昭和21年（1946）京都大学を退職された。静養ひたすらの甲斐あってか、昭和29年（1954）頃には臥床生活に別れを告げられるまでに体力を取り戻された。10年に及ぶ闘病生活の中にあっても、読書や資料の渉猟は欠かすことなく、必要な箇所はノートにメモしておられた。昭和24年（1949）に『アメリカ国土論』が、昭和29年に上述の『日本人漂流ものがたり』が世に出たのも、故なきことではない。なお後者に対しては、産経児童出版文化賞が授与されている。

机に向かって仕事ができるようになった頃と記憶するが、同人雑誌『地理学史研究』の発刊を企図され、それに発表する研究として仏教系世界図を取り上げることに決められたらしく、昭和29年共同研究の誘いが私にあった。以後数年にわたる研究の結果は同誌の1集（昭和32年）、2集（昭和37年）に分載されたが、これに手を加えて提出されたのが学位論文であり、昭和36年（1961）京大から文学博士の称号を受けられた。またこの論文の概要を、編集

者からの依頼により国際的な地図学史研究誌『イマゴ・ムンディ』（Imago Mundi）に寄せられたところ、その独創性が認められて1963年度のイマゴ・ムンディ賞に輝いた。

晩年における研究著作活動は一段と盛んで、海外出版書をはじめとする各種雑誌・単行本への寄稿、

古地図集の共同編集など、その詳細を記述する紙幅のないのが惜しまれる。「研究は呼吸ですよ。仕事をしていない研究者は呼吸していないのも同然ですよ。」とは先生の名言の一つである。なお、先生は昭和42年以来東海大学教授であられた。

（海野一隆）